013/06/03

2013 年度看護実践開発研究センター認定看護師教育課程

「緩和ケア」コース開講式式辞

古代インドのカピラ国王子として何不自由なく育ったお釈迦様にとってさえ「生・病・老・死」は人生の一大難問であったという。この「四苦」からの解放をテーマにして、栄耀栄華も妻子も捨て、脱俗の後についに悟入したブッダ８０年の物語こそ仏教の真髄である。そこでは、「諸行無常（全ては変転して止まないもの)」、「諸法無我（全ての存在には実体は無い)」、「涅槃寂静」（心安らかな悟り）の「三法印」を覚悟し、「苦・集・滅・道」の「真理」を体得した上に、「八正道」を歩めと言う。

こう説かれてもなお、幾億千万の生身の人間にとって「生・病・老・死」が人生最大の悩みであることにかわりは無い。まして、不治を宣告された病人、加齢と共に命の輝きを失った老人にとって、残りの生をいかに生き、いかに死ぬかは実に深刻な問題である。

ところが、重篤な末期がんに侵されながらもなお「平気」で生き、かつ「平気」で死んで行った話を教えられました。そこには、現代の荒廃した医療環境下にありながら、在宅医療・終末医療に情熱を捧げる小さな有床診療所の医師ら、彼らを支える看護師・事務職員・調理士・栄養士などの医療スタッフ、それを支援する実に多勢の民間ボランティア、収穫した農産物を無償で寄せてくれる周辺農家、スピリチャル・ケアを担う宗教者たちとの献身と心の交流が有ったという。しかもこの医療機関が山梨県内にあるというのです。

Ｏさんは働き盛りの５６歳。大学病院で悪性リンパ腫と診断され、その治療のために東京の一流がん専門病院に入院しました。しかし病勢は鎮まらず、間も無く末期の症状を呈するようになりました。がん一流の激痛に襲われるのですが、病院の治療は全て数値で表現され、生身に寄り添うも

のではなかったという。どうせ直らないなら故郷で死にたいという患者の希望で山梨に帰る決心をしました。が、末期がんの患者を受け入れる施設は見つからない。八方手を尽くしてようやく探し当てたのが件のクリニックでした。

転院するや医師の適切な痛みのコントロールが功を奏し、Ｏさんは漸く愁眉を開き、家族や見舞の人々と会話を取り戻していきました。病室から見える盆地の山々、周囲に広がる田園風景、院内の温泉に癒されたＯさんは食欲も回復し、病院の菜園で採れる野菜やコメに舌鼓し、家族や友人とも充実した心の交流を取り戻していきました。

しかし、先の無いＯさんにとって気掛かりなのは残していく娘さんの結婚のこと。日取りは決まっているもののそれまで生きていられるかどうか分からない。その不安を聞いたスタッフは、院内での結婚式を提案。ついに休診日に、親戚一同はもちろん、院内のスタッフ全員に入院患者、多勢のボランティアまでが参加して盛大な式典を挙行しました。それから２週間後、Ｏさんは静かに涅槃の地へと旅立って行きました。その全容は当日の花嫁・田中愛さんの作品『心からありがとう』（第１３回ふれあい医療体験記コンクール入選作）として、０６年１月２７付山梨日々新聞に紹介されています。

これらの話を含む『ゆっくり　ねろし』（土地邦彦編著・かもがわ出版）という本が上梓されました。早速、買って読みました。書名は「ねろし」だが、感動のままに一晩「寝ずに」読みました。読み終えて筆者の「死に方」は決まりました。死に場所はできる限り自宅。それがかなわなければ本書に書かれた有床診療所。ここに関わっている僧侶を導師にして三途の川を渡る。もちろん行き先は「西方浄土」。かくして、筆者は「涅槃」に至る道筋を発見したような気がしました。

ある席上で、この話をふじ内科クリニックの内藤いずみ院長に話したましたら、こんな詩があるのよと教えてくれました。「岸のほとりで佇むひとが／向こうへいくのに橋がない／わたしでよければわたし舟／ちょいと送っていきましょか／岸に着いたら名も告げず／ただのひとこと『おげんきで』」（里みち子『わたし舟』）。実に好い詩ですね。

いまや不幸なことに医療費抑制を企図するあまり、この国の医療現場は極度の荒廃に瀕しています。烏の泣かない日があっても、医療事故のニュースの無い日は無いというくらいの昨今です。こういう惨憺たる医療の現場にあって、直接に従事する人々以外に、患者やその家族、周囲の住民まで巻き込んで地域医療を支える体制があるという本書の例は、暗夜に一筋の行路を指差しています。

内藤いずみ先生推奨の里みち子『わたし舟』の詩には、「生と死」の両方が暗示されているようです。「緩和ケア」という医療の現場は生と死がもっとも隣接した現場であるはずです。「生」に帰るにしろ、「死」に渡るにせよ、そこに「納得」と「受容」が必要なのです。その「納得・受容」の環境のことを『わたし舟』に譬えたのでしょう。

今日から丸 7 か月の学習の成果として、みなさんが『わたし舟』の熟達した船頭になって下さるよう心から願ってやみません。